

第一三〇話

頼光朝臣打越丹後事籠宮権現願書事

『前太平記』上 卷第十九 三九四頁から三九七頁より

[頼光主従、山伏姿に変装す]

そうこうしているうちに頼光朝臣は、頼国出陣の後、その日の午の刻が過ぎてこっそり無根坂を発って、千丈が嶽へお向かいになる。この時まではやはりお供の兵が三十人余りいたが、皆さんどこまでも付き添い申し上げようと、ひたむきに望み

各何処までも付き纏ひ進らせんと、

強ちに望み申す

申し上げる者たちであったので、そうむやみには黙って見過ごしづらくてお連れに

者共なりければ、

さのみは黙止し難くて召し具し給へども、

なっていらっしゃったが、「きっと一人でも多いことは、かえって策略の妨げとなるだろうから」と言って色々と宥めて説得して、この野の果ての、その場の山中で、五人三人ずつお暇をお与えになったところ、力及ばずすごすごと大江山に向かった。その日は福智(巻)と言う所にお着きになったところ、とある山陰に主人がいない草庵があったのを、これこそおあつらえむきであると思って、六人の一行はこれ

是ぞ究竟の所なれとて、

六人の人々此に

にお泊まりになり、用意した手回りの道具などを取り出して、姿を変えて身支度を

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

宿し給ひ、

用意ありし調度ども取り出だして、

形を変へて出で立ち給ふ。

なさる。藤衣(貳)に笈を背負い、頭巾を眉毛の半分ほどに身につけ、粗末な足袋・脛

藤の衣に笈を掛け、

頭巾眉半ばに責め、

巾に力杖をついて、都の方角の山伏が、伯耆の大山(参)に参詣するかのように見せ、

その中で(頼光たちの中で) 年上である者(肆)を先導としようとして話し合ったところ、

頼光は今年三十七におなりになって、綱は三十八、季武は四十一、公時は三十六、

貞光は三十七になったということだった。それぞれ年を言う中で、保昌は今年で五

十八になったが、わざわざ年齢をいくつとも言わないで、黙って考えながら皆の年

を聞いて、「それぞれ先を争いおっしゃるが、議論するまでもなく私が先導である

「各我勝に宣へども、

論ずるまでも無く某先達ござめれ。

ようだな。ああ、耳の上の毛が白髪が混じっていないのは、三十とでも言って人に

哀れ、 鬢の髪の色斑白ならずは、

三十とも云ひて人に先達させ、

先導をさせ、まだ学んだことのない山伏修行、俗身を捨て仏道に専心する修行の出

未だ習はぬ山伏修行、

捨身抖擻の行体をも

で立ちさえも受け止め申し上げるが、年がとったところ目新しい先導に選ばれた。

受け申さんに、

年老ひたれば珍しき先達に撰ばれたり。

朝廷のためと思うからこそ、このような間抜けな姿もし申し上げるが、都で人に見

朝家の為と思へばこそ、

斯かる嗚呼がましき姿をも仕つれ、

都にて人に

られるべき姿か、いや、見せられる姿ではない。絶対に貴方たちは、誉れを奪い取
見へらるべき姿かや。 相構へて人々、 高名分捕りも、

ることも、先導者を差し置いて軽はずみな行動はしてはならない。ああ、恐れ多
先達を聞いて粗忽の挙動あるべからず。 穴賢、

い、先導者の掟を守りなさい」など洒落たので、皆さん笑いに興じあっていた。
先達の掟を守り給へ」 など戯れければ、 各咲壺の会にてぞ有りける。

【一行籠宮権現に参詣す】

こうして主従六人の皆さんは、笑い話を言い戯れるなどをして、互いに旅の辛さを
を慰めて、二十五日には丹後国の、とある祠に行き着いた。ここはどこであるのだ
ろうと、尋ねたくお思いになったところに、この祠の承仕法師^(伍)がやって来て、社
の前に御燈を差し上げようとして、小さい瓶を手に持って出てきた。季武が近寄っ
て、「もしもしお坊様。これはどんな神様をお祀り申し上げている社でいらっしゃ

「稍御坊。 是は何なる神を祝ひ進らせたる御社ぞ」

るか」と尋ねたところ、その法師は会釈もせず、「これは当国の一宮、籠宮権現^(陸)

彼法師会釈もなく、 「是は当国の一宮、 籠宮権現

とって住吉の神と御同体でいらっしゃる」と、ほんの一言で言い切って、土器を
とて住吉の神と御同体にて在す」と、 只一口に云ひ果たして、

取り出し、たいまつを照らして再びもとの道へ帰ろうとする。頼光は、「少しお時間をいただけますか。お坊様にお頼み申し上げたいことがある」と袖を引っ張りお引き止めになると、「ええい放してください。以前からこの山奥に鬼神が住んで、

「倡々放し給へ。 去んぬる比より此山の奥に鬼神住みて、

夜になると、山里に出て人を傷つけ獣を捕らえる。それゆえ申の刻を過ぎると、樵夜にだになれば、 山々郷々に出でゝ人を害し獣を捕る。 されば申の剋下がりては、

や牧童も家に帰って門を閉じる。私も当社の御燈を、いつも申の剋以前に差し上げ 樵夫牧童も家路に帰りて門戸を閉づ。 某も当社の御燈を、 何も申の剋以前に進らせ候が、

ていますが、今日は用事があって普段よりも遅くなったので、少しでも早く帰って 今日是用事ありて例よりも遅なはりつれば、 一足も早く帰りて

身を生き延びよう」と袖を振り払い逃げていくのを、一途に引きとめて、「我々は 命活き延びん」 「我々は

ご覧になるように廻国行脚の山伏であるが、どこの社でも神に幣帛を捧げて通るの 見給ふ如く廻国行脚の山伏なるが、 何処の社々にても奉幣して通るなり。

である。当社へも一枚の願書を捧げたく思うのだ。今しばらく待って、宝殿に奉納 当社へも一紙の願書を進らせたく思ふなり。 今暫く待ちて、宝殿に奉納して給へ。

してください。お礼は望みに沿おう」と宥め説得なされると、褒美に心を動かす身分 悦びは思ひ当たらん」 とすかし誘へ給へば、 禄に靡く

の低い法師は、「どのようにでも」と聞き入れてそばにしゃがんで座った。頼光

下臈法師、 「兎も角も」と 領承して傍らに踞り居たり。 頼光、

は、「そうだそうだ」とおっしゃったところ、綱が承知して、矢立_(漆)・畳紙_(捌)を

「其々」と 宣ひければ、

取り出しこれを書く。その言葉に言うことには、

帰命頂礼。当社の権現は、住吉大明神と同じ神で、国を守る社殿、恨みのある敵を抑え鎮める靈験あらたかな神である。家臣たち（我々）は偶然この瑞垣_(玖)の物陰に参り、特別に祈りを捧げる事のわけがある。なぜかという、明神が形を変えて世に現れることは、香椎宮の皇后_(拾)に力添えをし、三韓の夷族_(拾壹)を征伐し、垂跡_(拾貳)の時代の今は、父満仲に命じて、九つの頭を持つ毒蛇_(拾参)を倒す。求めるところは百世に及ぶご国を治め護る神との約束に違えず、すぐさま朝廷の敵を取り除くことを。願うところは代々仏の信仰に向き合うことによって、偏に家運の災いを除き安心することを。さてここ最近丹州周辺で、悪の道を成しとげる者がいて、何の意もなく人民を困らせ、しなくてもよいのに国家を混乱させる。その幻術を操る様は、ある時は急にその姿を隠し、この場からいなくなり、他の場所に姿を現す。ある時は突然その身が分裂し、千のものに変わり、万のものに化ける。人の力が普通は敵うところのものではなく、怖がらないという者はいない。頼光はもったいなくも弓馬の家に生まれる。偶然の朝廷の選任に応じて、ちょうど今千丈が嶽の悪鬼の

岩屋に向かおうとして、現に四所の穏やかな威光のある社殿に頭を下げる。仏の衆生への救いの時が整い、もう姿を現した。戦いの勝利を、どうして疑おうか、いや、疑いはしない。まるで昔日の神仏への信仰の因果に報われ、同時に今日の真心を慈しまれ、天と地の神々が国にご加護の目を配り、明君の天竜が悪を降伏させるような施しを与え、勝負をたちまちに決し、敵を四方にどけてください。もしもこれを倒す機会を逃すならば、国は鬼たちの国となり、朝廷の威光は勢いが弱くなり、道は波旬(拾肆)の道となり、朝廷の政治はとうとう廃れ、神仏は天に去り、太陽・月・星は地におちるだろう。どうして悲しまないはずがあろうか、いや、悲しむはずだ。(我々の)真心が早く報われ、神仏の加護がすぐにあるならば、莊嚴(拾伍)を社に美しく飾り、供米を御前に捧げ、神の功德を天下に与え、朝廷の政治を永久に受け継ごう。丹誠こめて祈りは真心があり、神仏の深い心が誤ることがないように。祈願するところは以上のように。敬って申し上げる。

正暦元年三月二十五日

靱負尉(拾陸) 碓井貞光

主馬佑(拾漆) 酒田公時

勘解油判官(拾捌) ト部季武

滝口内舎人(拾玖) 渡部綱

右京権大夫(廿) 藤原保昌

左馬権頭(廿壹) 源頼光朝臣

<原文>

帰命頂礼。当社権現者、住吉大明神之變座、而国家鎮衛之宝社、怨敵降伏之靈神。臣等適詣于此瑞籬之影、殊

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

有祈請之旨趣。何者、明神化現之昔者、佐於皇后香椎、而征三韓之夷賊、垂迹之今者、命於臣父滿仲、而誅九頭之毒蛇。所仰不違百世鎮護之神約、速退於朝廷之敵。所願以為累代渴仰之值遇、偏發家運之眉。爰頃年丹州前後之間、在魔道成就之者、徒惱人民、恣乱国家。其幻術自在、或頓隱其形、此消彼見。或忽分其身、千變万化。非所人力之能及、無不恐怖者。頼光苟生於弓馬之家。適応於朝廷之撰、方赴於千丈惡鬼之巖窟、忽拝於四所和光之社壇。機感之純熟、既現。鬪戰之勝利、何疑。偏酬曩日之帰依、且憐今時之丹誠、神祇社稷廻於擁護之眸、明王天竜垂於降魔之手、勝決一時、怨退四方。若滅之過期者、国為鬼魔之國、帝業永衰、道為波旬之道、朝政竟廢、神明仏陀去於天上、日月星辰墮於地下。豈可不悲乎。懇誠早酬、感応速至、瑩荘嚴於社頭、奉供米於宝前、施神徳於四海、伝王法於万代。丹祈有誠、冥慮勿誤。仍所請如件。敬白。

正暦元年三月二十五日

靱負尉 碓井貞光

主馬佑 酒田公時

勘解油判官 卜部季武

滝口内舎人 渡部綱

右京権大夫 藤原保昌

左馬権頭 源頼光朝臣

<書き下し文>

帰命頂礼。当社権現は、住吉大明神の変座にして、而も国家鎮衛の宝社、怨敵降伏の靈神なり。臣等適此の瑞籬の影に詣し、殊に祈請の旨趣を誅す。いかんとなれば、明神化現の昔は、皇后香椎を佐け、三韓の夷賊を征し、垂迹の今は、臣父滿仲に命じて、九頭の毒蛇を誅す。仰ぐ所は百世鎮護の神約を違はず、速やかに朝廷の敵を退けんことを。願ふ累代渴仰の值遇、偏へに家運の眉を發かんとこを。爰に頃年丹州前後の間、魔道成就の者在り、徒に人民を悩まし、恣に国家を乱す。其の幻術自在なること、或ひは頓に其の形を隠し、此に消へ彼に見はる。或ひは忽ち其の身を分かち、千に變じ万に化す。人力の能く及ぶ所に非ず、恐怖せずといふ者無し。頼光苟も弓馬の家に生まる。適朝廷の撰に應じ、方に千丈惡鬼の巖窟に赴かんとして、忽ち四所和光の社壇を拝す。機感の純熟、既に現はる。鬪戰の勝利、何ぞ疑はん。偏へに曩日の帰依に酬ひ、且は今時の丹誠を憐れみ、神祇社稷擁護の眸を廻らし、明王天竜降魔の手を垂れ、勝つことを一時に決し、怨を四方に退けたまへ。若し之を滅すこと期を過ぎば、国は鬼魔の國と為り、帝業永く衰へ、道は波旬の道と為り、朝政竟に廢れ、神明仏陀天上に去り、日月星辰地下に墮ちん。豈悲しまざるべけんや。懇誠早く酬ひ、感応速やかに至らざ、荘嚴を社頭に瑩き、供米を宝前に奉げ、神徳を四海に施し施し、王法を万代に伝へん。丹祈誠有り、冥慮誤ること勿れ。仍つて請う所件の如し。敬つて白す。

正暦元年三月二十五日

靱負尉 碓井貞光

主馬佑 酒田公時

勘解油判官 卜部季武

滝口内舎人 渡部綱

右京権大夫 藤原保昌

左馬権頭 源頼光朝臣

と書いた。例の法師がこの願書を献上し、印をぎょうぎょうしく結び、手を打ちつ

印異々しく結び、

拍掌弾指

まはじきをし、厳かな様子で執り行って、そのまま宝殿にお納め申し上げた。すぐ

厳めしげに仕なして、

に約束通りに引き出物をお与えになったところ、法師の喜びは格別で、色々なご機

様々の饗応ごと

嫌取りの言葉をあたり構わず言って、会釈をして帰っていった。こうして皆さん

云ひ散らし、

色代してぞ帰りける。

は、祠の外に袖を片敷いて、夜通し祈り夜をお明かしになったのだった。

叢祠の露に袖を片敷ひて、

注釈

※壺・福智……現京都府福知山市内のどこかと思われる。

※式・藤衣……藤や葛の繊維で織った着物。身分の低い者が着る。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※参・伯耆の大山……鳥取県西部の山。古くから信仰が厚い。

※肆・頼光たちの中で年上である者……『前太平記』の物語上では上記にある通りの年齢であるが、『広辞苑』等の辞書における彼らの生年を見ると、頼光は948年生まれの正暦元(990)年当時は42歳、保昌は958年生まれの32歳、源次は953年生まれの37歳、季武は950年生まれの40歳、貞光は954年生まれの36歳となり、保昌が最も若いこととなる。もちろん物語は創作であり、作者が当時伝聞した情報で書いたものであり、辞書の情報の真偽も明らかではないが、念のため記しておくこととする。

※伍・承仕法師……寺院の仏具の管理や法事の雑用にあたる下級の僧。

※陸・籠宮権現……現京都府宮津市にある籠神社のことか。元官幣社で、丹後国一宮。「元伊勢根本宮」と称される。

<宮津市籠神社と福知山市大江町豊受大神社に関する一仮説>

作中にある通り、頼光公一行は「無根坂」を出た後、「福智」にたどり着き、草庵で一夜を明かし、住吉明神の小祠で祈願する。

そして、その住吉の祠は「丹後国一宮」の「籠宮権現」、現在の「籠神社」と推測される神社と同じ神を祀っているとされている。

実際に籠神社がまつる神は住吉の神とは違うようだが、ここに籠神社がまつる神を記しておく。

- ・彦火明命
- ・相殿神
- ・豊受大神
- ・天照大神
- ・海神
- ・天水分神

「籠神社」は通称「元伊勢」。三重県の伊勢神宮外宮が現在の場所に鎮座する前に、この地に鎮座していたという伝承に由来する呼称である。

そして、千丈ヶ嶽の存在する福知山市大江町にも、「元伊勢」と称される神社が存在する。それが「皇大神社」、通称「元伊勢内宮」と、「豊受大神社」、通称「元伊勢外宮（以下外宮）」である。

大江町の「元伊勢」も同様の伝承を所有する。そのため、現在でも大江町と宮津市は双方に自分たちの「元伊勢」が本物であると主張しているようだが、今はその話は置いておこう。重要なのは「籠宮権現」と立ち寄った「住吉の御祠」が同じ神を祀っていることである。

先ほども申し上げた通り「籠神社」は「元伊勢外宮」の鎮座との伝承であり、大江町の「元伊勢外宮」と伝えられる「豊受大神社」の祭神は「籠神社」と同じく豊受大神を祀る。

「外宮」の境内に注目したい。『大江ふるさと学』には以下のように記される。

「豊受大神社にも本殿を囲んで小宮が並んでいる。神社明細帳には境内社四二社とある。(中略)それらの小宮の中で、ひととき注目されるのが天田神社である。(中略)神社明細帳には、祭神、底筒男命・中筒男命・表筒男命とある」

(大江町・大江町教育委員会発行『大江ふるさと学』平成14年1月 50ページより)

底筒男命・中筒男命・表筒男命とは住吉の神のことである。

「外宮」の境内にある小宮の一つである「天田神社」。それが住吉の社であると言うのだ。

まだ神社明細帳を確認したわけではないが、「天田神社」のことを調べてみた。

大阪府交野市私市に同名の神社が存在し、そこでも同じく住吉の神を祀っている。

この「天田神社」のある交野には古来から天の磐船に乗って現れた饒速日命を祀る。

住吉の神は航海安全を守護し、海の神である。天の磐船が海と関係あることから、「天田神社」では海の神である住吉の神を祀っているという。

そして、「元伊勢外宮」の鎮座する山は「舟岡山」と称され、集落には「天田内」という名がつけられている。

この地にも「海」と「船」の関わりが見え、『大江ふるさと学』の著者は、この「天田神社」が古代のこの地の守護神であった可能性を示唆している。

そういえば、「籠神社」の祭神にも「海神」がいた。

仮に『前太平記』の「住吉の小祠」が、現在「外宮」の中にある「天田神社」であり、本当にこの小祠の神が住吉の神であるとしよう。

それは、現在伝承のない「元伊勢外宮」には、この物語の書かれた当時、この地に酒吞童子退治の伝承があったのだと考えられないだろうか。

※漆・矢立……墨壺に筆を入れる筒のついた携帯用の筆記用具。

※捌・畳紙……懐に入れていた紙。

※玖・瑞垣……神社などに設けられる生垣。

※拾・香椎宮の皇后……仲哀天皇の妻で、応神天皇の母である神功皇后のこと。

※拾壹・三韓の夷族……朝鮮半島の新羅・百濟・高句麗のこと。神功皇后は仲哀天皇の死後、住吉大神の神託を得て、応神天皇を身ごもったまま朝鮮半島に出陣し、三韓を征伐した。

※拾貳・垂跡……仏が衆生を救うために、その本体を神の姿にかえて現れること。

※拾参・九つの頭を持つ毒蛇……第91話での出来事(2021年3月時点で未訳)。

※拾肆・波旬……釈迦の修道を妨げようとした魔王。

※拾伍・莊嚴……仏像などの嚴かな飾り。

※拾陸・靱負尉……宮中の諸門の警護に当たった役所・衛門府の三等官。

※拾漆・主馬佐……皇太子の乗馬や馬具を司る主馬署の次官。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL(月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>)をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※拾捌・勘解油判官……国司交代の時前任者かあら後任者への事務引き継ぎを証明する文書の審査に当たった官職の三等官。

※拾玖・滝口内舎人……宮中の警備にあたった職。

※廿・右京権大夫……右京を管轄した司法・行政・警察などを担当した役所の長官。

※廿壹・左馬権頭……宮中の馬の飼育等にあたった左馬寮長官。

いよいよ鬼の城へと踏み込みます。この話は漢文を訳すのが嫌で嫌でたまりませんでした。

「住吉の御祠＝元伊勢外宮」説は本当にとんでも論なので流していただいて結構ですが、私は藤元がこの伝承が届く範囲（摂津や丹波？）に住んでいたのではないかと考えているので、籠神社と大江町の元伊勢を結び付けて物語を書いたことは否定は出来ないと考えます。

また、今回で保昌は結構若い見た目であることが想像できますね。弟の狼藉のストレスを考えたら逆も考えられますが。

あと、私にとって面白かったのは、季武がみすぼらしい僧に話しかける役割をさせられていることですかね。頼光や他の四天王とは異なり、来歴が「人間らしい」季武は「俗」側の者として描写されている。それがなんだかとても面白い。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2017/6/19

改訂：2021/3

海熊童子